



**DSURE©MICHAEL CRICHTON**

# **フィスクロージャー マイクル・クライトン**

酒井昭伸 訳



Hayakawa Novels

## DISCLOSURE

by Michael Crichton

Copyright © 1994

by Michael Crichton

All rights reserved including  
the rights of reproduction  
in whole or in part in any form.

First published 1993 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan  
by arrangement with

Janklow & Nesbit Associates

through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

検 印

廃 止

### ディスクロージャー

1993年12月15日 初版発行

1994年1月15日 3版発行

著 者 マイクル・クライトン

訳 者 さか い あき のぶ 酒 井 昭 伸

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(3252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-207827-8 C0097

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

# ディスクロージャー

日本語版翻訳権独占  
早川書房

© 1993 Hayakawa Publishing, Inc.

ダ  
グ  
ラ  
ス  
・  
ク  
ラ  
イ  
ト  
ン  
に



以下の行為は使用者の違法な雇用慣行とする。

(1)人種、皮膚の色、宗教、性、または出身国を理由として、個人を雇用せず、その雇用を拒否し、解雇すること、あるいは雇用に関する報酬、期間、条件または特典について、差別待遇を行うこと、あるいは

(2)人種、皮膚の色、宗教、性、または出身国を理由として、個人の雇用機会を奪い、奪う可能性のある方法で被用者または就職志願者を制限、分離、類別すること、あるいは被用者たる地位に不利益を及ぼすこと。

——公民権法第七篇より抜粋

〔「各国法制にみる職場の男女平等」〔新版〕〕

森山真弓著・東京布井出版刊より）

権力は、男のもので女のものでもない。

——キャサリン・グレアム

（ワシントン・ポスト会長）



---

## 登場人物

|              |                    |
|--------------|--------------------|
| トム・サンダーズ     | ディジコム社製造部部長        |
| スーザン         | サンダーズの妻            |
| シンディ・ウルフ     | サンダーズの秘書           |
| ボブ・ガーヴィン     | ディジコム社最高経営責任者（CEO） |
| メレディス・ジョンソン  | 同先端機器事業部統轄部長       |
| フィル・ブラックバーン  | 同法務部長              |
| ステファニー・カプラン  | 同財務担当責任者（CFO）      |
| マーク・リュース     | 同製品設計部部長代理         |
| ドン・チェリー      | 同プログラミング部部長        |
| メアリー・アン・ハンター | 同データ通信部部長          |
| アーサー・カーン     | 同マレーシア工場長          |
| ムハンマド・ジャアファル | 同マレーシア工場ライン監督      |
| エディ・ラース      | 同オースティン工場長         |
| ジョン・コンリー     | コンリー＝ホワイト社部長       |
| エド・ニコラス      | 同財務担当責任者（CFO）      |
| ジム・デイリー      | 投資銀行員              |
| ゲイリー・ボーサック   | ハッカー               |
| コニー・ウォルシュ    | コラムニスト             |
| バーバラ・マーフィ    | 判事                 |
| ベン・ヘラー       | ジョンソンの弁護士          |
| ルイズ・フェルナンデス  | サンダーズの弁護士          |
| マックス・ドルフマン   | 経営コンサルタント          |

---

月  
曜  
日



発信元…DC/M

アーサー・カーン

トウインクル／クアラルンプール／マレーシア

受取先…DC/S

トム・サンダース

シアトル（自宅）

トム…

合併のことを考えると、このファックスは自宅で  
読んだほうがいい。オフィスには持っていないほ  
うがいいぞ。

増産に向けて打てるかぎりの手は打っているが、  
ヘトウインクル組立ラインの稼働率はわずか二十  
九パーセントだ。初期検査では、平均アクセスタイ  
ムが一二〇〜一四〇ミリ秒で、どうしてスペックど  
おりの性能を発揮しないのか皆目わからない。接触  
不良による画面のちらつきもまだ残っている。原因は  
ヒンジ部の構造にあるらしい。先週、DC/Sでの  
見直しを反映させたはずなんだが、どうやら問題は  
まだ解決していないようだ。

合併のほうはどうだ？ 資金は潤沢になりそう  
か？ 会社は有名になれそうか？

そうそう、すこし早いがいつておこう。昇進おめ  
でとう。

アーサー

六月十五日、月曜日。その日トム・サンダーズは、遅刻をする気などさらさらなかった。とはいえ、ペインブリッジ・アイランドの自宅でシャワーを浴びはじめたのが、午前七時半。あと十分で髭を剃り、身支度もすませて家を出ないと、七時五十分のフェリーに間にあわず、八時半の出社が不可能になる。八時半にはコンリー・ホワイト視察団との会議がはじまってしまいうから、ただでさえステファニー・カプランの覚えがめでたくないところへもってきて、またしても不興を買うことは確実だ。加えて、きょうもこなすべき仕事如山積しているうえに、たったいまマレーシアからとどいたばかりのファックスで、状況はいっそうやっかいになった。

トム・サンダーズは、デジタル・コミュニケーションズ・テクノロジー——通称ディジコムのシアトル本社

で、部長職についている。この一週間、会社では気骨の折れる日々がつづいていた。というのは、ディジコムはいま、ニューヨークにある出版関係のコングロマリット、コンリー・ホワイトに吸収合併されようとしているからである。合併の目的は、二十一世紀の出版事業にとって欠かせない技術を獲得すること。

そんな状況だけに、マレーシアからのこの最新情報はうまくない。自宅に送ってきたアーサーの判断は正しかった。会社宛だったなら、この件をコンリー・ホワイトに説明するのに大汗をかいていただろう。なにしろ、連中ときたら——

「トム？ どこ？ トム？」

妻のスーザンが寝室から呼んでいる。サンダーズはシャワー室から顔をつきだした。

「シャワー中！」

スーザンがなにか答えたが、水音でよく聞こえない。サンダーズはシャワー室をあとし、バスタオルに手を伸ばしながら、大声でききかえした。

「え？ なんだって？」

「子供たちにごはんを食べさせられるかってきたの」スーザンは、ダウントアウンの法律事務所に勤める弁護

士である。出勤は週四日。子供たちと過ごす時間を増やすため、月曜日を休みにしているのだが、家事一般については、彼女はあまり得意ではない。そのため月曜日の朝は、サンダーズはどうしても遅刻しがちになってしまふ。

「トム？ 子供たちにごはんを食べさせてもらえるの？」

「むりだよ、スー」サンダーズは大声で呼びかけた。洗面台の時計は、七時三十四分をさしている。「もう遅れそうなんだから」

髭を剃るため、シンクに水を張り、顔に石鹸の泡を塗りとくった。サンダーズはなかなかハンサムで、いかにもアスリートらしい、悠然たる雰囲気を持ち主だ。鏡に映った脇腹には、大きな青痣ができている。気になるので、指先でふれてみた。これは土曜日、会社のタッチフットボール部の試合があり、そのときマーク・リュースンにタックルされたあとだ。リュースンはスピードはあるが、どうも大味でいけない。それにサンダーズも、もうタッチフットボールをするような齢ではない。体格はまだまだ立派なものだし、体重も標準体重プラス五ポンド以内ではあるのだが、手ですきあげた濡れ髪には、白

いものがちらほらとまじりだしている。そろそろ自分の齢を自覚して、テニスにでも切り換えるべきかもしれない。

スーザンが浴室にはいつてきた。まだバスローブは身につけたままだ。ベッドから起きだした直後でも、スーザンがきれいに見えない朝はない。化粧などしなくても十二分に見栄えがする。

「ねえ、どうしてもだめ？ あら、すごい痣。やあねえ、もう」スーザンはそういいながら、サンダーズの頬に軽くキスをし、彼のために持ってきたコーヒーマグを洗面台に置いた。「八時十五分までにマッシュをお医者さんにつれていかないといけないんだけど、あの子たち、どっちもまだひとくちも食べてないのよ。わたしも着替えがまだでしょ。だから、食べさせてくれないかしら。おねがい、ね？」

あまつたらしい声でせがみながら、スーザンは彼の髪をくしゃくしゃにしはじめた。その拍子に、ローブの前がはらりとほだけた。彼女は前をかきあわせようともせず、にっこりとはほえんで、

「そうしたら、ひとつ借りということに……」

「スー、むりなんだ」サンダーズはあせった顔で妻の額

にキスをした。「けさは会議があつて、遅刻できないっていったらう」

スーザンはため息をつき、

「あらそう、じゃ、いいわよ」というと、口をとがらせて出ていった。

サンダーズは髭剃りにかかった。

ほどなく、妻の声が聞こえてきた。

「さあ、子供たち、いくわよ！ イライザ、靴をはいて……」

それにつづいて、イライザのすすり泣き。まだ四歳のイライザは、靴をはくのが好きではないのだ。おおむね髭をそりおえたころ、ふたたび妻の声が聞こえた。

「イライザ、さっさと靴をはいて、弟を下に連れていきなさい、いますぐに！」

イライザの返事ははつきりしなかったが、すぐにスーザンがびしゃりといった。

「イライザ・アン、あなたにいつてゐるんです！」

ボタン、ボタン、と大きな音が響いた。スーザンが廊下にある寝具用クローゼットの引きだしを音高く閉めたのだ。子供たちはふたりとも泣きだした。

母親の怒りにふれて途方にくれたイライザが、浴室に

やってきた。顔はくしゃくしゃで、目に涙をためている。

「ババァ……」すっかり涙声だった。サンダーズは片手をさしだし、娘を抱きよせた。もういっぽうの手には、まだ髭剃りを持ったままだ。

「もう四歳なんだから、お手伝いくらいできるでしょ！」廊下から、スーザンの怖い声が飛んでくる。

「ママァ」娘はサンダーズの脚にしがみつき、すすり泣くばかりだ。

「イライザ、いいかげんになさい！」

この一喝で、イライザはますます激しく泣きだした。スーザンはそれでまた腹をたて、廊下をどすんと踏みつける。火のついたように泣く娘をほうっておくに忍びず、サンダーズは、

「しょうがない、スー、朝ごはんはぼくが食べさせるよ」

と妻に声をかけ、シンクの水を流し、娘を抱きあげた。「さあさあ、イライザ」なだめながら、娘の涙をぬぐう。

「朝ごはんを食べにいこうか」

廊下に出ると、スーザンがほっとした顔をしていた。

「ほんの十分でいいの、それだけ。コンスエラったら、また遅刻よ。いったいどうしちゃったのかしら」

サンダーズは答えない。九カ月になる息子のマットは、廊下のまんなかにすわりこみ、ガラガラを床にたたきつけながら泣きじやくっている。サンダーズはもういつぱうの手で息子をかかえあげた。

「そうら、いくぞいくぞ、子供たち。ごはんだごはんだ」

マットを抱きあげるとき、腰にまいていたバスタオルがぱさりと落ちた。イライザがそれを見てけらけらと笑いい、

「パパ、おちんちんみえてるー」といいながら、片脚をふりまわして一物をつついた。

「こらこら、そんなところを蹴るんじゃない」サンダーズはいったん子供たちを降ろし、もういちどタオルを巻きつけてから、またふたりを抱きあげ、階下に向かった。スーザンの声がうしろから追いかけてきた。

「マットのシリアルには、わすれずにビタミンをいれてやって。スプーン一杯。ライス・シリアルはもうだめよ吐きだしちゃうから。いまは小麦のほうがいいの」

浴室にはいったのだから、バタンとドアの閉まる音がした。

娘がまじまじとサンダーズの顔を見つめて、

「きょうもたいへんなひになる、パパ？」ときいた。

「うーん、そうらしいね」

階段を降りていきながら、サンダーズは思った。こいつは七時五十分のフェリーには間にあいそうにないな。

朝一の会議に遅刻すること、まちがいなした。遅れるといてもせいぜい数分のことだろうが、会議前にステファニーと打ち合わせできないことに変わりはない。しかしまあ、フェリーから電話しておけばいいか。そうすれば――

「ねえ、パパ、おちんちん、あたし、ある？」

「ないよ、ライザ」

「どーして？」

「そういうふうになっているんだよ」

「おとこのこはおちんちん、おんなのこはわれめちゃん」まじめくさった口調だった。

「そういうこと」

「どーして？」

「どうしてもさ」娘をキッチン・テーブルの椅子に降ろし、隅からハイチェアを引っぱってきて、そっちにはマットをすわらせた。「さて、シリアルはなにを食べようか、ライザ。ライス・クリスピーズ？ シュエックス？」



「シエックス」

マットがスプーンでハイチエアをたたきだした。サンダーズはカップボードからシエックスとボウルをとりだし、マットのまえには小麦シリアルと小さめのボウルを置いて、冷蔵庫をあけ、ミルクをとりだした。イライザはそのようすを眺めていたが、おもむろに口を開いた。

「パパ？」

「うん？」

「ママねえ、しあわせになるといいね」

「そうだね、ライザ」

小麦シリアルにミルクをかけ、軽く混ぜてやり、マットのまえに置く。つぎにイライザのボウルをテーブルに載せ、ざらざらとシエックスをあげてやってから、娘の顔を見た。

「このくらい？」

「うん」

娘のボウルにミルクをそそぐ。

「あーっ、だめえ！」娘が悲鳴のような声をあげ、いきなり泣きだした。「じぶんでつぐのにい！」

「あ、ごめん、ライザ——」

「——だしてえ——ミルクだけだしてえ——」イライザ

はヒステリックな声でわめきつづけた。

「おとうさんが悪かったよ、ライザ、でもね——」

「じぶんでつぐのにい！」椅子をすべり降り、床にへたりこんで、足をじたばたさせた。「だしてえ、ミルクだけ！」

一日に何度か、イライザはこれをやる。第一次反抗期なのだ。これに対しては、親は断固とした対応をしななければならないとされている。

「ごめん、悪かった。だけど、食べてもらわなくちゃいけないんだ、ライザ」

サンダーズは息子にシリアルを食べさせようと、となりの席に腰をおろした。マットはシリアルのボウルに手をつっこみ、つっこんだその手で両目をこすった。たちまち息子も泣きだした。

サンダーズはマットの顔をふこうとして、ふきんを手にとった。その拍子に、ひよいとキッチン時計に目をやると、早くも八時五分前だ。そろそろ会社で電話して、すこし遅れると伝えておいたほうがいい。だが、そのまえにイライザに朝食を食べさせてしまわないと。娘はまだ床にすわりこみ、ミルクのことで足をばたつかせて叫びたてている。